

黎明期の安南佛教

川 上 正 史

一

安南佛教の黎明期は何時の頃であつたか。此の問題につき幾等か考究した所を述べてみたいと思ふ。先づ安南における佛教の痕跡を探してみよう。その最古のものは夙に外國學徒によつて論議されてゐるのであるから、それを先に検討する事とする。

今安南と呼ばれてゐる地域は古代のチャンバをその内に包含してゐるが、このチャンバとは即ち「梁書」五四、諸夷傳林邑國條にみえる、所謂「暹達」によつて西曆一九三年頃に建てられたと考へられる國である。その占城(林邑)の故地で、今の安南のナトラン附近のポチャンから、スリマラー王(杉本直次郎氏、「林邑建國の始祖につきて」に依れば「暹達」に該當す)の子孫と稱する者の建立にかゝる梵文碑が発見せられてゐる。

この碑文の最初の研究者であるベルグーニユ氏は、この碑の建立年代を「二世紀までは遡り、三世紀を下らぬもの」となしてゐる。又マスベロ氏は彼の「チャンバ王國」なる名著の中に於いて(同書五一頁)

「しかるに我々は最も古きチャンバの碑文について「大凡その日附として三世紀だと考へられ」「そしてそれは同時に二世紀までは遡る可能性がある」と云ふ見解をもつ」

と述べてゐるから此の碑は大体この頃のものとして考へられるのである。さらにフィノオ氏は河内極東學院學報におさめられてゐる「碑文の研究」(卷十五、一九一五年刊所收)にその碑文の全文を挙げ、その後この梵文を適當な言葉で補足しながらフランス譯をこゝろみ、次で

「萬物の「去來」と云つた無常の觀念、他人の利益に彼の幸福を提供するといふ諸の生類への憐み、彼の恩惠の特性

を表すシュリーマラーの子孫の誰れにも依る之等の表現は非常に明かな佛教的露感である。その故に其王が偉大なる慈悲深き人の教へを信奉して居たと云ふ結論に達する」

と述べて、それが佛教に關係の深いものなるを明かにして居るのである。

其の他にも同様にこの碑文をもつて、佛教的色彩の濃厚なものとなせるものとして、例へばシルヴァン・レヴィ博士監修の「インドシナ」なる書の「インドシナの宗教」なる章において、ミユズ氏は（同書一〇三頁）

「印度支那の最も古き碑文は佛教的靈感を持つて居り、サンスクリット語で書かれて居る。ナトラン附近のポチャンから発見せられた其等は我々の時代から二三世紀まで遡り得るが此の時代に於いて安南南部に於ける印度人の植民と正式なサンスクリット語を用ひた王朝の存在を證明して居る」

と述べ、エリオット博士の「ヒンドウイズム、アンド、ブダイズム」に（同書卷三、一三九頁）

「ポチャンの碑文は正確なサンスクリットの散文であり、そして佛教徒と思はれる王の斷片的な演説をふくんで居るとあるが如きである。

唯、クーマラスワミー氏のみはその著「ヒストリー、オブ、インディアン、アンド、インドネシアン、アート」に（山本智教譯「印度及び東南亞細亞美術史」あり）

「此の印度の東方移動の恐らく最古の積極的明証は、もつともはるかなる地域のアンナンのポチャンの梵語碑文で、西暦二〇〇年頃のものである」（原書一五六頁）とか「ポチャンの古いカーマサンスクリットはギルナル・ルードラダーマンの碑文の文字と緊密に類似した文字で書かれており、此等の事實は曾て東方の殖民は西方インドから航行して來つたものであるといふ見解にみちびいた」（原書一五八頁）

とか述べて、やゝ異なつた觀點より之を考察してゐる様であるが、彼としても決してこの碑文を佛教に無關係なものとは考へておらないのである。

さらに改めて私自ら原文について研究をこゝろみてみても結局フィノオ氏や其の他の人が推定した様にこの碑文はどうしても佛教信仰をもつた王によつて建てられたものと考へざるを得ないのである。

即ち原文中

(一) "maddhye" の "idp" "svannam" の "m" "phrttyasya" の "t" "varena" "sotvann" の "vv"

の如く父音を重ねてゐる語がこの文中に含まれてゐるが之れは佛教梵語の特長であること。

(二) "visram" なる語は字書 (sanskrit-English Dictionary 1899 Oxford) には出てゐない。ところが之れと非常に似かよつて發音され異なるスベルを持つ "visisram" なる語 (同書九九二頁) がある。それで夫を "visram" とスベルするのは佛教梵語の特長ではなからうかと考へられること。

(三) 及び既にフイノオ氏等が指摘せる如く

"gatagati" "prajñān Karuṇa" 等所謂佛教的 instr. fation を持つた語が多くしかも一語として佛教と相容れぬ語がない。

等よりして、どうしても佛教を信奉せる王によりて、もしくはかゝる王の時代に建てられたものと思われるのである。であるから南部安南への佛教傳來の時期は之れより推定して大體この頃即ち二世紀後半ころま遡でらせ得るであらう。

一

次に支那文獻によつて考察してみると最初に擧げうるのは「梁高僧傳」卷一康僧會傳(大正五〇、三二五)であつて、「其の先は康居人なり。世々天竺に居り。其父商賈に困りて交趾に移る。會年十餘歲。二親並びに終。至孝を以て服畢り出家す。」

と見えて、吳の孫權の赤烏二年(二三九)建業に來つて、佛法を弘めた康僧會は、其の父が商によつて、印度より交趾に航して後にこの地で生れ、十餘歲にして兩親を亡ひ、出家した事を知るのである。彼は「歷代三寶紀」卷五には「魏齋王世正始年中天竺沙門康僧會」とあるが、これは代々印度に居住せしためであり、又「隋書經籍志」に「三國の時西域沙門康僧會有り、佛經を齊して吳に至る」等とあるのは、その支那名に康の字を冠せるによりても知らる

る如く、康居國の出であるからである。

茲でちよつと附考しておくべきは、この康居國を今の何處に比定せられるかといふ事である。白鳥博士の研究によるに（西域史研究上二七頁）康僧會が支那にありしを西曆二四一年とすれば「年代よりして當時の康居國は、今のキルギス、コサツクの地に當る様であるが、康僧會の事跡に關する最古の記録たる高僧傳の編纂時代即ち南北朝時代の康居は北史西域傳に「康國は康居の後なり」とあつて、南北朝から隨代にかけて、支那人は康國（今のサマルカンド）を康居と考へていた様であるから、康僧會等か康某と呼ばれたのは南北朝にいふ所の康國、今のサマルカンドに關係してであらう」と述べて居られるから、これに従ふと、この傳に所謂康居國は現代のサマルカンドに比定してよいものと考へられる。

それはともあれ、商人の子として生れたこの康僧會が、十餘歳にして交趾で出家したといふ事實は、さらに一步すすめてこゝに彼を出家せしめた師の存在を豫想せしめるのである。即ち彼出家以前に交趾即ち北部安南にも佛教が入つて、かゝる大徳がゐた事が推定されるのである。

それに又馮承鈞は「歷代求法翻經錄」に於いて「惠詳弘贊法華傳」卷二（大正五一ノ十四）によつて、支暹梁接の事に言及し「支暹梁接は此に正無畏と言ふ。月支人なり。二五六年交州に於いて法華三昧經を譯す。」としてゐる。これは同じく「歷代三寶紀」卷五（大正四九、五六頁〇段）にもみえることで、甘露元年七月即ち二五六年に交州即ち北部安南へ來て譯經してゐることが明かである。之と前の康僧會の出家したのが支那に來た二四一年以前である事を思ひ合せて考察するとき北部安南への佛教傳來は明らかに、三世紀前半を下らぬものと考へる事が出来るのである。

以上述べ來れる所とペリオがその「牟子考」（國立北平圖書館刊所收）なる論文の序に於いて、南海道による佛教東傳の可能を説いてゐることや、松本信廣氏が「印度支那の文化」（東洋思潮所收）の中に之をうけて、

「また佛教も輸入せられてゐたとみえ有名な牟子（牟博）が交趾に存つて老莊の教に満足せず佛教に歸依したのもこの時であつた」

と述べてゐること、馮承鈞が「中國南洋交通史」の中で「漢書地理志」を引いて（同書三頁）

「紀元前一二世紀時に在りて漢使の足跡已に南印度に至る」

と述べ、南海交通路が此の頃より既に開けてゐたことを明かにしてゐる事又ブルヂルスキの「阿育王物語」に「佛教は商業路により擴つた」とかシルバン・レヴィ氏「ラーマヤナ史」に「往昔の印度人はガンヂス河印度洋に特に馬路に於て特異の航行技術を有していた」とか記してゐる事などをさらに考へ合すとき、確かに二世紀後半より三世紀前半にわたる間に於いて安南に佛教が傳へられていたことが斷定出来ると思ふのである。

しからばその當時行はれた佛教は何か即ち大乘かそれとも小乗かといふに、「開元釋錄」卷二（大正五五、四九〇頁B段）に依ると、康僧會の支那に於いて翻譯せし七部二十卷はその中に「大集玉鬘品」の異譯に當る「菩薩淨行經」二卷。又「小品般若經」といはれる「吳品經」五卷並びに大乘戒本たる「菩薩二百五十法經」一卷等をふくんで居り、又彼の傳より推察して、これら的大乗系梵本は安南にすでに行はれてゐたものを支那にもたらしたのであつて、新たに印度より將來せるものと考へられないから、北部安南に行はれてゐたものは、明かに大乘系の佛教であり、又南部安南の佛教にしてもその梵文碑の内容よりして大乘系となしてよいかと思はれるから、二世紀後半より三世紀前半に安南に輸入されし佛教は大乘系のものとなしうであらう。

唯々いまのところでは資料の不足より正確なる傳來年次を定め得ざるは私のもつとも遺憾とするところであるが、安南佛教の黎明期はかゝる時代を當てる事が出来ると思ふのである。